

凍える女

小川未明

青空文庫

おあい村に入つて来たという噂が立つた。おあいを見たというものがある。また見ないというものがある。見たという人の話によると、鳥の巢のような頭髪を束ねて、顔色は青白くて血の氣のない唇は、寒さのためにうす紫色をしていた。背には乳飲児を負つて、なるたけ此方の顔を見ないように急いで、通り違つてしまった。きつと、森の中の家に来ているのだらうといった。

村の北には森がある。森の中に一軒家があつた。五六年前まではその森の中に二軒あつたが、今は、一軒は壊れてしまつて、ただ古い大きな家が一軒建つてゐる。この家も前に壊れた家も、森の中の秘密のある家としてこの村では知られてゐた。ちようど森が黒い扉のようにこの二軒の家を包んでゐた。夜になると、森を暗い夜が取り巻いて、その中に隠れた家ではいろいろの罪悪が行われたらしい。赤い色の着物を被た女や、紺地の股引を穿いた男や、白い手拭を被つた者等が一つの瞬きする蠟燭の火影を取り巻いて、その下で博打をした。また不義の快樂に耽つたりしたのである。一軒の家は肥つた主人で、そ

の名をおくらといったが、ちようまん脹満で、しまいには動けなくなった。このおくらは動けなくなっても、二人の年若い女を使つていて、自分は厚い蒲団の上に坐つてさまざまの来る男共を相手として、相変らず博打をしたり、いろいろな性質の分らない仕事の取り持ちをして、いつもすすべした生白い顔には笑みえをたたえて頭髪には油をこてこてと塗つていたのである。この女の、暮らし向きの秘密などを知っているものがなかった。或る夜、ふとこの女は何処どこへかこの家から立退たちひいてしまった。明る日あく、いろいろな男共が、この家の前に集つて口を極めてこのおくらのことを悪者などといつて罵ののつた。けれど、それもいづれへか散つて、その日の暮方くれがたからは、全くこの家は淋しくなつて戸が閉しまつていた。中を覗いて見ると、何もなかったらしい。どういふものかその後誰も来てこの家の始末を付けるものがなかった。雨が漏つたり、風が壁板したみを破つたりして、彼かれ是これ一年余りもその儘ままになつていた。そのうちに或日、町から人が来て、この家を取り壊して何処へか車に乗せて運んで持つて行いつてしまつた。まだ後に腐れた畳や、紙の煤すすけた障子などがその儘はたけの中なかに置いてあつたが、どういふものか其等それらのものは、その明る日になつても、ついに幾日たつても持つて行かずに、其処そこで腐れてしまつた。それから、もう、この家の跡あとに訪ねて来るものもなかった。

まだ、家が立ち腐れになっている時分、この空家の中でも、いろんな者が集つて来て博打をするなどという噂もあったが、この家が取り壊されてしまふと共に其様な噂も影さえなくなつてしまつた。

二

それからというもの、森の中の秘密は、全く後に残つた一軒の家に集められたのである。おくらはその後何処へ行つてしまつたか、またおくらに使われていた年の若い艶めかしい、怪しげな女共はやはりいつしよになつてゐるものか……誰も、その行衛や消息を聞いたものがなかつた。後に遺つた一軒の、柿村屋という男は、にがみ走つた、極め黙つた四十五六の男であつたが、腹は一層黒くて落付いた、見ただけでは分らない人物である。村の人々はこういつた。何といつても、まだおくらは女だ、柿村屋は、食える男でない、おくらをうまい具合に立行かぬようにし、あの森の中から追ひ払つたのも柿村屋の仕事だろうなどといつた。柿村屋は、誰に遇つても丁寧な物言ひをして、さも親切らしいことをいつた。おくらに対しても、やはり、あの苦み走つた顔付をして、極めて黙つた落付いた態

度をかえなかつたものと思われる。何をおくらがしても、柿村屋は干渉がましいことを言つたこともなく、いつも、冷然として、氣にとめずに傍そばから見ぬ風をして、見ては冷あざわら笑つていたらしい。しかし腹の中では、どういふことをたくらんでいたか知れない。おくらをこの森の中から、追い出したのも柿村屋の仕事だと村の人のいつたのも、あながち根のない話でないようにも思われる。

こうして、今では柿村屋には、町からも、また近村からも、この村の者でも、人に知れぬように集つて博打をした。柿村屋は決して是等これらの人に対しても、親分らしい顔をしたことがなかつた。いつも苦み走つた顔でじろりと集つた人の顔を見廻わして考え深いような眼付に、折々おりおり、底意味の知れない笑いをたたえた。

おあいは、やはりこの柿村屋へ来るようになってから家うちを失なくして落ぶれてしまった一人である。

おあいの亭主というのは、人の好い、女房のいふなりになつてゐる男であつたが、時々氣に向かぬことがあると癩かんしゃく癩やくを立て、怒鳴どなつたり、器物を投げ付けて壊したりしたが、直すぐに、おとなしくなつて言うなりになるような意氣地のない男であつた。従つて、自分は

働きというものがなかった。村では、この男を仏のようだと叫んだものもあつた。

おあいには子供が三人ある。亭主がこういうような風で、常に貧乏をしていた。亭主は村役場の小使に雇われたり、近隣の醤油問屋の帳ちようづけ付などに雇われたりしたが三月みつぎと同じところに勤めたことがない。これは、一つはこういう男の癖として厭あき性しやうであつたからである。直すぐおあいの隣りには、おあいの叔母にあたる人が住すんでいた。この人は、全くの独り者で、骨こつにく肉にくというものはただおあい一人しかなかつた。おあいは、極めてはきはきとした勝気かちげの女であつた。また、自分の出来ることなら人に対しても、随分物をやることなどに惜おしみはしなかつた。けれどしみじみと物事を考うるといふような女ではなかつた。思つたことは、後からどうなつてもはきはきとしてしまふ。而そしてたとえ悔くゆるようなことがあつても決してそれを口に出して人に向つて愚痴をいふようなことのない勝気な女であつた。隣の叔母とも、いろいろ言い争つたこともあつたが、つまり、おあいの勝気な性質から起つたことが多かつた。叔母という人は、極めて、物の分つた穩かな人で、死ぬ時まで人の世話になるのを好まずに自分で出来ることは自分でして人に迷惑をかけなかつた人である。それで、おあいの子供等には、よく、着物を買つてやつたり、また家のために尽つくしたこともあつたが、自分が、おあいの家へたえず出入りして、子供等の世話をするとか、

おあいの家が困るからといって自分で来て、その相談相手となるとかいうようなことはしなかった。おあいも、どうも困るから少し金を借して下さいと言って行けば、或時は黙って渡した。或時は「そんなに沢山はやられないからこれだけ持って行ってほしい。」といつて少しばかりしか借してくれなかったこともあった。こういう風で、叔母は死ぬ時まで、あまり人の世話にならなかつた。それで、心は親切な人で、憐れあわに思う時は、自分の出来るだけの親切は、蔭になつてしたものである。しかし何事でも表に立つてするということよなことは好まなかつた。

叔母は七十で死んだ。死ぬ前々日まで、自分の身のまわりのことは自分の手一つでした。死ぬ前の日になつてから、おあいに向つて、「私も、もう長くはないと思う。この家と、少しばかりの金をお前に遺して行く。」とただこういって目を瞑つぶつてしまった。流石さすがに、勝気なおあいも、この日は心から泣いて、死んでしまった叔母を今更ながら懐なつかしく、悲しく思つて泣いた。

金は、幾何も残っていないかった。おあいは、葬式を済まして、仏事を奇麗に営んだ。せめて、これが亡き叔母に対して尽すべきつとめであるように思った。

叔母の死後一年と経たぬうちに、僅かばかりの金も借金を払ったり、やるべき処にやりたりするとだんだん少なくなってしまうた。而して、ついに叔母の家も売らなければならなくなつた。この夜おあいは考えた。こうして家まで売ってしまったては、また瞬く間に昔のように苦しい、みじめな生活に立帰ってしまうのが目に見えている。いまのうちに、どうかして方法を立てなければならぬと考えた。……このことを何を言つても張合のない亭主に向つて相談しても、何の役に立たないと思つた。おあいは三人の子供のことを考えたり、行末のことを考えて、その夜は眠られなかつた。

始めて森の中の秘密の家に来たのは、この明る日のことであつた。

いつしか村では、おあいが森の家に出入するのを知らぬものがないまでになつた。おあいが身形にもかまわず、小さな子供を負つて、雪を分けて、森の家を指して行くのを、晩方、戸口に立つていて見た人があつた。しまいには、自分も人前を憚らずに公然と森の家から出て来たのを見た人があつたという。それは、おあいが勝負に敗けて、すっかり金を取られて歸つた時であつた。其様なことで、村の人々が予想したように、一年とたたぬ

うちに、おあいはこの村にすることが出来なくなるまでに困窮に落入おちいりつてしまった。而して、この村を引き払って、山を越えて、西の海に近い谷の村に引き移って行った。

それから、いつしか二三年は経ってしまった。落葉の雨に混つて簷のきを打つ頃となり、いつとなく村は黄色く霜枯れて、冬が来て、また雪の降り出す頃となった。

けれど誰も、別におあいのことを話のほに上すものもなかった。おあいの住んでいた家は、他人が入っていて、其処に圃の栗の木も、黄色く葉が霜枯れて風が吹いて、それを落してしまい、今は僅かばかり梢に枯葉が残っているばかり。

今夜にでも雪が降って来そうだというように、非常に寒気がました。その日のこと、村では、おあいが入って来たという噂が立ったのである。

これを見たという人の話によると、髪は鳥の巣のように束つかねられて、顔色には血の気がなくて、足には草履ぞうりを穿いて、背には乳飲児を負っている。而して、顔を見せぬように急いで通り過ぎた……という。ちょうど、おあいがこの村にいて、森の家に通うた時の有様と同じである。けれど、その人はいうのに、身形もその時より一層憐あわれに貧しげに見られた。而して、背に負っている乳飲児は、この頃生れたものと見えるといった。村の人は、

「何処へ来たのだろう……。」「といった。……多分森の家に来たのだろう……。……なんで来たのだろう……。……きつとああい勝気な女だから少しばかり金を造って、前の仕返しをしに来たのだろうなどといって噂し合っていた。

ここに、おあいはまだこの村にいる時分に世話をしやった老夫婦が住んでいる。その家は貧しい上に、馬鹿な、令一という息子があつた。而してこの老夫婦のものは細い哀れげな暮らしを立ていた。おあいは、よくこの老夫婦のものに自分のまだよかつた頃には着物の破れたのや、また洋傘こうもりの壊れたのや、また暮になれば餅や、豆などいろいろのものを恵んでやったことがあつた。

空には、黄色な雲切れがして青い空が覗いている。馬鹿の令一は、青竹を切つて、それに小刀で小さな穴を明けて、吹いて、ツウ、ツウ、ツウという音を出していた。板の間には、竹屑たけくずが白く散つて、鈍どんより然とした小刀の光りが灰色の光線の裡うちに眠っていた。

前の柿の木の、落ち残つた葉が紅くなつている。彼方かなたの杉の木には小鳥が来て、令一の吹き鳴らす、管笛くだぶえと合あわして鳴いていた。其処へ、老婆が入つて来た。

奥で炬燵こたつに当あたつてゐる爺さんに向つて、

「おあいさんが来ていなさるといふが……。家へも来なさるだろう……。」「といった。

二人は、ひそひそとしておあいの身の上話を始めた。若し来て、泊めてくれいといわれたりすると、この寒空に、厭だということも出来ず困ってしまふ。……などと語っていた。青い空がだんだん出て、黄色な雲が開いて、淋しい海を見ようように冬の夕暮は晴れていた。けれど西風は身を切るように寒かった。沖の方は真暗で、今夜にでも雪が降って来るかも知れないと、村の人々に思わせたのである。

四

明る日、おあいが森の家から出たのを見たという人があつた。その人の話によると、泣き叫ぶ乳飲児を負つて、慌てたようにして、其処から出ると、人家のある方へは来ずに、裏道から淋しい田圃たんぼの方へと行つたと語つた。

おあいは、頭から、黒い合羽かっぱを被つてみすぼらしい風をして逃げるように、並木の、瘦せた、寒空にひよろひよろとして立っている細道を歩いて来た。もはや、枯れた草の葉に草履が触れて、熟したまま、死骸となつてしがみ付いている草の実が、ぱらぱらと路傍に散つた。道の上の、水溜みずたまりには、水の色が静かに澄んで、悠ゆうきゆう久に淋しい流れている

空の姿を映している。誰れ一人として、この水を覗くものもなければ、雲は、その水溜りに映って音なく影は去来するにまかせている。背に負った乳飲児は、火のつくように泣き立てた。おあいは、何か後方から、物にでも追われるように急いで来たが、全く独りとなった時、野中の細道の上に立つて四辺を見渡した。もう自分の住んでいた村が彼方に黒くなって霞んでいゝ。而して近隣の村々が、彼方にも、此方にも黒くなってこんもりとした森の中にしずかに溜息を洩らしているように見られた。樺色に、褐色に、黄色に、すがれて行くさまさまの林の色は、次第に黒ずんで来た。見渡す限り、人影もなくて、ただ刈り尽された田や圃は、漠然として目に見えるもの、すべての自然は鬱いだ顔付をしている。

おあいは、路傍の、石の上に腰をかけて、背から、乳飲児を下して乳を含めた。児は、乳房にしがみついて乳を吸いはじめた。けれど、あわれな、おあいの頬の肉は落ちて、乳はしなびていて思うようになかったので児は、やはり咽びつづけて時々、声を張り上げて泣き出したのである。おあいは、この痛ましい、寒い自然に対して、途方に暮れているという風であった。

今にでも降り出して来そうな空を仰いで、頭をあげて見廻していたが、折々、身を切る

ような風が広野を吹き渡つて、彼方にも、此方にも、ぱらぱらと黄色な、枯れた木の葉のひとしきり散るのが見られたのである。而して、児の声は、風のためにかすれて眼から頬に流るる涙が凍るかと思われた。児の手は、赤くなつて人參のように腫れ上つていた。母親の胸には、青い筋が現われて、一枚の鉄板のように冷たかつた。この下に熱い血液が流れて、滋養分のある乳の出ることが不思議に考えられた。

おあいは、まだ乳の飲み足りないで泣きつづけている児を再び抱き直して、背の中に入れた。而して、赤い花模様についている帯を締めて身仕度をした。児の頭ばかり出して、黒い合羽を被ると、再び急いで野中の細道を走つて、街道の方へと行つた。遠くには、町の家根やねが見えた。その彼方には、高い国境くにぎかいの山々が連つて見えた。淋しい細い道は無限いずこに何処へともなく走っている。

午後の、雲の往来する、風の吹く、暗い空は益々ますます曇つて来た。

五

栗の木の下に立って、令一は手に長い竿を持つて、管笛を吹きながら、小鳥を呼んでい

た。その笛の音は、風に消されて、折々聞えたり聞えなくなったりした。そのたびに雨のように、ぱらぱらと大きな木の枝から、枯葉が吹き捲まくられて、下に、散っている葉は、からからと音を立ててあたりを駈かけ巡った。

「えらく、暴あれてくるだ。……と空を見ながら、家の前を通る人がいつて過ぎた。

沖の方は、墨すを摺すったように暗くなった。婆さんは、外に出ている下駄や、桶などを取り入れて、薪まきを割きっていた爺さんに向って、おあいさんは、もう、来なさらないと見える。森の家から、何処へも寄らずに帰ってしまったらしい……と話していた。其処へ、ぼんやりとして令一が竿を引き摺りながら帰って来て、おあいの、もう田圃はたけみち道から帰ってしまったことを告げた。

老婆は、喜ばしそうな顔をして、この寒い時分に泊られるようなことがあると困ったのが、それは都合がよかったというようなことをいって、気の休まる風が見えた。爺さんは、あの勝気の人のことだから、よもやみすばらしい風をして来はしまいと思つたが、それも博打に勝つて帰つたらうかなどといっていた。三人のものは家に入ってしまった。

戸外では、ひゆうひゆうと鞭を振るように鋭い風の、梢に当る音が聞えた。それに混つ

て、ばらばらと障子窓に当るものの音がした。令一は、起つて窓を開くと、

「霰あられだ、霰あられが降つて来た。」と大きな声でいって、喜んで小躍りこおどした。而して、直様戸すくさま外に駆け出して、霰あられだ。霰あられだ。といつて走つていた。霰あられは、令一の衣物きものの上に当つて、ころころと袂たもとを振ふるうたびに散つてしまつた。けれど頭髮の中に落ちたものや、襟元に溜つたものは、その儘白くなつて、体の温あたたかみ味あじで解けかかった。圍に取り残された菜の葉の上にも、白くなつてたまつた。また地面にも、下駄の跡がつく位に白くなつてたまつた。

「夜は、雪だぞ。」といつて爺さんは、炬燵の中にもぐり込んだ。婆さんは、起つて勝手元へ出て、夕飯の仕度にとりかかった。青い烟けむりは、するすると窓から流れて出て、寒い風に消されている。

三人のものは、暗くなりかかった窓の処に立つた。障子戸を半分開いて、其処から、雪の降っている外を眺めていた。

「もう、一寸位になつたらう……。」

「今頃、おあいさんは、山越して行けるだらうか……。」

「まだそんなに遠く行けまい。」

いつしか風は止んで天地は静かになつた。而して、寒気は次第に加わつて、雪は大きく

綿を断つたように、ぼたり、ぼたりと沈黙の空気の裡に、音を立て降って来た。

「夜になるだろうのう……あの山越える時分には……。」

と、令一は、雪に、暮れかかっている空を見詰めながらいった。汽車の笛の音が遠くで、雪のために微かにしやがれて聞えた。

指の頭が赤くなって、寒気は加わった。ランプの火は、凍えたように硝子のホヤの中に紅く点つて、いつもよりか冴えて清らかになつて見えた。炬燵に当たつても背のあたりがぞくぞくと刺すように寒さが迫つて来た。

「まだ、うす明るいのう……。」

「雪が降つたからだ。……雪明りだ。もういつもなら真暗なのだ。……。」

と婆さんが窓の方を見ながらいった。

「雪明りというものは、気味の悪いものなのう……。」

と十六にもなつて鼻を垂らしている令一は、言つて、まだ、管笛を手から放さずに握つていた。しかし、もうそれを口に当て、窓際で彼方の森の方に向つて吹いて見る気にもなれなかつた。

寂寥と、夜とが、地の上に襲つて来た。而して、雪は積つて、寒さは益々加わつた。

六

風の叫びは、野の末に遠く聞えた。夜は、いつしか吹雪の中に更けてしまった。

豆ランプの心を細くして、枕についた老婆は、足の冷えるので容易に眠りに陥らなかつた。まごまごしているうちに、夜中近くとなつたらしかつた。ごとごとと、戸に打ち当たる吹雪ふぶきの音に、まぎらされて、最初の一声は聞えなかつたが、二たび、

「今晚は……。」という、小さな声にハツと老婆は胸とどろに轟いた。

つづいて、はげしいザーという吹雪が、烟出けむだし窓の障子に当って小さな声は消されてしまった。その後は、暫しばらく死のような沈黙が来た。老婆は、空耳であつてくれればいいという願ねがが起おこつた。けれど、まだどきどきと心臓は波をうっているの、臥ねていても落付くことが出来なかつた。三みたび、

「今晚は……。」といつて、トン、トン、トン、と戸を叩く音がした。而して、戸の外の人は、身に吹き積つた雪をハタハタと振っている音がした。老婆は、この声があたしかに女の声であることを知つた。おあいさんが来たのだと思つた。而して、この儘黙つていよう

か、それとも出て戸を開けなければならぬかと床の中で躊躇していた。老婆の胸には、この刹那せつなに、おあいから、これ迄まで受けた親切が思い出され、もらった品物の種類や、その数すら心の中で読まれて目先にちらついた。而して、義理としても戸を開けなければならぬような気がした。

「今晚は……。」

と、いう声が出て、つづいて、トン……トン……トン……と戸を叩く音が聞えた。寒さに戦ふるえている、力のない姿が、この衰えた声で目に見るように分った。

「婆さん！ 起きて開けてやんなさい。」と、いつの間にか眼をあけて、やはり、この声を聞いていたらしい爺さんは、老婆にこういつて、自分は、外にまで聞えるようなせきばらいをした。老婆は、起きて、ランプを手に持って勝手許かつてもとに行った。

家の内を占領している空気も、肌には氷のように冷ひやかになって触れたのである。老婆は、しんとした勝手許に出て、ランプを棚の上に載せて、下駄を穿いて戸の傍に立ち寄った。外では、暴風に、圍の木立が口笛を吹くように鳴っている。

而して、壁板に来て、衝き当る吹雪の音が怖すくしく、凄まじすまじかった。

「どなたですか……。」と老婆はしんばり棒に手を掛けていった。

「早く、あけて下さい。わたしです……。」と、女はいった。

老婆は、おあいさんかと口に言おうとしたが、心に他の暗愁あんしゆうが萌きざして言葉を出さずにしまった。凍り付いた戸をガタピシさせて五寸許ばかり開くと、寒い風に、粉のような雪が混まつて顔に真面まともに吹き付けた。老婆の体は、いつしか温ぬくみが消えて、外界と同じく冷え切っていた。

黒い合羽には、雪が白く斑ふちとなつて凍りついているのを頭から被かつて、足には足袋も穿きかず片方だけしか草履ぞうりも穿かない女が幽霊のように身をすぼめてもぐり込んだ。而して、物を言わずに其処たちすくに立竦たちすくんでしまった。もう、気力が衰えて、がっかりとしてしまったのである。老婆は、怖れと、寒さに自分も慄ふるえていた。

「どうなさつた。まあ、この雪に、今頃になつてから……。」といつて、この儘ままにしているは、この女が凍え死ぬと思つたから、まごまごしながら、囲炉裏いろりに火を焚たき付けにかかった。風が、どつと吹き込んで棚の上のランプを吹き消そうとした。老婆は慌あわてて、戸口に駆けて戸を閉めて、また、勝手の板の間を上げて、中から薪まきを取り出して火を付けにかかった。幾たびか火は、付きかけては消えて、容易に付きそうでなかつた。

爺じいも、起きて来て、三分心のランプに火を点けて、其処の勝手許しに吊したのである。ラ

ンプはまだぐらぐらと揺れている。外には、吹雪の音が絶えなかった。

「ひどい寒さだ。」と、爺はいつて、「さあ奥さん此方こつちに来て、合羽をとって上つて下さい。」といった。

けれど女は、其処に黙つて竦すくんだまま動かなかった。

「帰ろうと思つたらこの雪で、日は暮れてしまふし、とても山越えは出来ぬから、引きかえしたがもう道が分らなかつたので……。」といつて、女はランプに照らされた顔の色は、血の気が失せて青白かつた。而して、手足はガタガタと震えている……。

爺は、心から、この女の人の末路を氣の毒に感じた。而して、自分も土間に下りて、女を介抱した。老婆は、やつと火を燃やし付けた。いつしか、この夜中の客を厭いとわしく思つた心も消え失せて、全く憐みの心になつてしまつた。而して、盛さかんに火を燃もやし立てた。焔えんは煤すすけた壁や、障子を紅く染めて家の内が急に明るくなった。障子を隔てて次の間には、何も知らずに令一が眠っている。外の、吹雪の音は、やはり小止こやみもなく、狂っているのが聞えたのである。

「爺さん、その合羽をとつてあげなさい。」と老婆が此方を向いて言った。白髪しらがには焔えんが映つて、片頬は明るかつた。

「どんなに寒かったか知れない。」と爺は言いながら、堅く結んで凍っている合羽の紐を
漸く解いた。女の巢のような頭髮からは、雪が解けて、雫が滴っている。爺は、この黒い、
白い雪の斑点の付いた昆布のように凍えた合羽を後方に取り脱けると、女の背には、乳
飲児が負されていた。これを見た老婆は、

「まあ、可哀そうに……。」「といって、驚きと憐れみのために眼をうるませた。

「子供を負っているさるんだ。」「といって、爺も、近寄って顔を覗いた。

「眠入っていないさるのか……。」「といって、この寒さに、声も立てず母親の背にしがみ付
いている乳飲児を見ていじらしく思った。が、忽ち怪しまれた。ちようど女の後方となつ
て、ランプの光りはよくこの蔭までは、明るく見せなかつた。

「寒かつたらう……。はやくおろしてやんなさい……。」「

といつて、爺は、ちよつと子供の頬に指を触れて見た。而して、驚いて、声を立てんばか
りに後退りをして、眼を見張つた。

「奥さん……。」「といつて、その後も言わず、老婆に向つて、

「早く燈火を持って来い。」「……」

二人は、ランプを、眠っている乳飲児の顔の上に差し出した。顔の色は、青白くなって、

雪がかかかっていて解けなかった。二人は、黙って互に顔を見合った。いつの間にか子供は、寒気のために、凍え死んでいたのである。

この時、女は、頭髮かみのけを乱して、幽霊のように土間に立ったまま物も言わずぶるぶると慄えている。頬は削り落したように窶やつれて、青晒あおぞめて、眼ばかり、怪しく、狂わしく、気味悪く、昵じっと坐ってランプの火影を見詰みめていた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

初出：「三田文學」

1912（明治45）年1月号

※誤植を疑った箇所を、「北国の鴉より」岡村盛花堂、1912（大正元）年12月5日発行の表記にそって、あらためました。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2017年2月2日作成

2017年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

凍える女

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>